＜平成 25 年度研究発表会開催概要＞

日　時:平成 25 年 11 月 12 日(火)
場　所:ホテルアウィーナ大阪
発表校:大阪市立文の里中学校

テーマ:「薩摩半島、農業体験と平和への思い」～大阪・鹿児島を結ぶ直通集約列車に乗って～

薩摩半島、農業体験と平和への思い

～大阪・鹿児島を結ぶ直通集約列車に乗って～

大阪市立文の里中学校
教諭　鎌田　賢一

はじめに

本校、大阪市立文の里中学校は、大阪市中心部から南下し、南の玄関口といわれる阿倍野地区にある。校区内には、「天王寺」「あべの」といった繁華街があり、三明町・松崎町・文の里などの古い町並みもある。近年、再開発の流れを受け高層マンションが多く建てられている。また、校区内には公立・私立の高等学校や専門学校も多くあり、文教地区でもある。また、本校は大阪市内で4校ある夜間学級のうちの1つが設置されている中学校でもある。

本校の全生徒数731名（3年7学級、2年6学級、1年6学級）は、大阪市内の中学校の中では大規模校である。部活動に関しては、吹奏楽部やラグビー部などの毎年全国大会に出場となる伝統ある部活動もあり、活発な活動を続けている。

校訓である「自他を尊重する」「想像力を培う」「責任ある行動をとる」のそれぞれの要素をさまざまな教育活動の根底にすえ、「生きる力」に結びつけられるように取り組んでいる。

文の里中学校　正門（正面）

修学旅行の企画にあたって

まず、修学旅行の目的は2つで、「集団生活を通して、集団の一員としての自覚をより高め、全体のことを考え、正しく行動できる力を養う。」「体験活動を通して自主的・主体的に活動できる力を養う」である。また、それぞれの目的について「平和学習」「班別行動」「農業体験」の3つの要素から企画した。

平和学習

第1学年ではピースおおさか大阪国際センター（大阪市中央区）での見学を通して戦争の悲惨さを学習した。第二次世界大戦が終わってもなお社会全体でみると戦争の起きている地域が世界にあり、そのような現代社会を生きていく中で、平和について考えることの大切さを考えさせる活動につなげた。

班別行動

第1学年での泊行事では、野外炊飯やフィールドワーク、夜のレクレーションを班別行動で取り組んだ。第2学年では奈良市内フィールドワークを通して、班員の中で役割を分担させ、協力して目的地を目指すことから、段階的にリーダーとなる生徒のリーダーシップの質の向上と、生徒間のコミュニケーション能力の向上をめざした。

農業体験

先ほど述べたように、本校周辺は、市街地であり、自然環境に乏しく、生徒の成長過程においての「自然体験」の場が少ないと思う。そこで、生命の尊さや自然の厳しさなどを学習させる指導方法、自然に対する感性を磨かせる指導方法などを検討し、修学旅行に農業体験を盛り込むことにした。加えて、農業という一次産業に触れることで、職業的キャリアの幅を広げる体験とした。

【修学旅行　行程表】

1	6/4（火）	新大阪（現地集合）――鹿児島中央…武家屋敷…知覧特効平和館（平和学習）…ホテル
2	6/5（水）	鹿児島市内（班別行動）…鹿児島水族館…鹿児島市・他市（各地民泊）入村式
3	6/6（木）	各農家（農業体験）・退村式…鹿児島中央――新大阪…学校

修学旅行地としての鹿児島

修学旅行先をどこにするかを検討するにあたり、先程の3つの活動を考慮し、鹿児島と決定したが、他にも、平成23年に発生した東日本大震災の影響が心配された中、本校修学旅行委員会では、まず西日本を候補にあげた。続いて、平成23年3月より、九州新幹線が本州と鹿児島まで直通でむすばれたことが「鹿児島へ簡単に行ける」となり、候補地となった。これまでの鉄道であれば、大阪―鹿児島間は乗り換えもあり、約5時間以上もかかっていたが、このお蔭で約2時間も短縮され、鹿児島での活動時間が増えたことが決定の要因となった。

事前の取り組み

生徒による修学旅行委員会を発足させたのは、3学年の4月当初からである。修学旅行におけるルールなどを決めたり、鹿児島について事前に情報機器や資料などを用いて調べ、廊下に手作りポスターなどを掲示することで、生徒自らモチベーションの喚起につなげた。

また、生徒の自主活動の取り組みとして、レクレーションを考える係をつくり、バス移動の時間を利用して楽しむ工夫を考えさせた。それぞれの役割にあたった生徒たちは、準備にかかる苦労と、当日に活動する緊張感を感じながら修学旅行に参加した。

修学旅行の取り組み

〈農業体験〉

農業体験を実施するにあたり、鹿児島市近郊にある「いちき・串木野（くしきの）」「松元（まつもと）」「吉野」「吉田」「伊集院（いじゅういん）・日吉」「喜入（きいれ）」「伊敷（いしき）・郡山（こうりやま）」の7地区に、全生徒をグループに分かれさせ民泊および農業体験を行わせた。生徒は、3～4名で1グループとなり各農家にお世話になった。各農家には取り組みに特色があるため、生徒一人ひとりの状況を確認し振り分けていった。

民泊先の決定後、事前に自己紹介あいさつ文を完成させ、送付した。体験の内容は、野菜収穫、蕎麦打ち、木工細工など、到着した日の午後からと、翌日の午前中に活動を行わせた。農家に着くと、すぐ生徒たちはジャージに着替え、畑まで行き、作業の説明を受けていたが、土による服の汚れやミミズなどを気にする様子があったが、すぐに土にも慣れ、作業を真剣に行っていた。

その日の作業が終わると、各農家に戻り、生活のルールについて説明を受けた。自宅で

農業体験　じゃがいも掘りをしている様子

過ごすこととは違い、生徒の多くから困惑する様子が見てとられた。布団のたたみ方やシーツのなおし方までも指導してくださるご家庭もあった。教員が地区訪問をしていると、各農家の皆さんからは「よくできていました、すばらしい生徒さんたちでした。」とお褒めの言葉をいただいた。生徒たちにとっては環境に対応することを学習する良い機会になった。

最後の自由時間には、受け入れ農家の方々から大きな気遣いもあった。修学旅行の行程にはなかった桜島の見学や地元の温泉に連れて行ってもらうなど、時間の許す限り、生徒が地域と触れ合う時間をとても大切にしていただいた。

退村式では、帰りのバスに乗り込む前に別れを惜しみ、写真を撮り合ったりする姿が多く、印象的であった。一泊という短い期間であったが、生徒たちの心に残る貴重な体験になった。

この修学旅行が終わってから、各農家とのやりとりがあり、とても楽しそうに2泊3日の思い出を振り返り、イラストを描く様子もあった。生徒が書いたお礼の手紙には、生徒の感謝の言葉が自然に出ていた。

〈平和学習〉

平和学習については鹿児島県知覧(ちらん)を設定した。事前に、まず社会科授業で、第二次世界大戦についてDVDを活用して学習を行った。DVDには特攻隊の映像もあったが、『俺は君のためにこそ死にいく』という映画を活用し、学年全体で鑑賞させた。この映画は実話をもとに実際に知覧の飛行場から旅立った特攻隊員たちの生き様を描いた映画である。涙を流す生徒も見られ、鑑賞後の生徒たちの感想文には、「若い人たちが戦争のために死なければならなかったのか。そんな命令はおかしい。」「自分とあまり年齢の変わらない人たちが国のためにと命をかけたことをすごいと思った。」「戦争のためとはいえ、死ぬと分かっていて敵艦に突っ込むなんて怖くてできない。現代に生まれて良かったと思った。もっと特攻隊員が出撃の時に何を考えていたのか知りたい。」など様々な意見が書かれていた。そして、知覧特攻平和会館のパンフレットをもとに、平和について考えさせた。

平和学習　知覧特攻平和会館にて

バスを降りて特攻平和会館に着くと、阿倍野区出身の特攻隊員の遺影に迎えられ、特攻隊員についての全体説明を聞いた。生徒たちは真剣に展示に向き合い、その中には特攻隊員の遺影や遺書を見つめる生徒もいた。

〈班別行動〉

今回の修学旅行では、この3年間を通した集団行動の集大成として、事前に各班で、班長・資料係・時計係・地図係・美化保健係の5つの役割を決め、鹿児島市内の散策ルートや昼食をとる店などを自分たちで決めさせた。班長は班員の意見をまとめ、班ごとの市内散策のルールを考えさせた。資料係は班員の希望を聞きながら、インターネットやガイドブック等で市内の名所などを調べた。そして、地図係が指定のチェックポイントを回り

班別行動　1班(6人構成)鹿児島市内フィールドワーク

つつ観光もできるルートを考え、そのルートで時間内に集合場所までたどりつけるかを時計係が考えた。美化保健係は当日の班員が出すゴミの回収や体調不良やケガ等があった場合の連絡係をつとめた。

市内散策では、前日のバス移動の際、バスガイドさんから鹿児島では桜島の噴火が日常的であるとの説明を受けたが、散策中幸いにも天候は良く、城山展望台から見える桜島の景色は素晴らしいものがあった。また、ふるさと維新館などから学ぶ歴史など、普段の授業の中からは、得ることができない多くの内容を学習することができた。また、昼食時には歩き疲れた体を休ませようと、事前に調べていた鹿児島で有名なラーメン屋さんや食堂などを利用し、生徒たちからは笑顔で市内を散策する様子もあった。

ほとんどの班が問題なく集合できたのですが、活動中に男女がバラバラになってしまう班や道に迷ってしまう班、時間配分を間違って遅れてしまい、タクシーで到着する班もあり、課題も残る班別行動であった。

今後の課題として

①目的地選考基準や指針を明記する。

特に安心・安全に関しては、年々保護者・地域の目が厳しさを増し、コンプライアンス（法令遵守）が叫ばれているため、早急にガイドラインを決めなければならない。そのためには、校内で衛生管理や安全対策に関する研修も必要となる。加えて、生徒・保護者の希望も取り入れること。また、費用が大きくなり保護者の負担とならないためにも、学校としての基準をつくること。

②「思い出づくり」の実施を続ける。

今後も体験・ふれあいの重視ができるように、引継ぎを行うこと。特に、民泊と農業体験を中心にすること。

退村式　吉野地区（下田町公民館にて）

※農業体験・民泊の魅力は、未知の地を訪れ、田舎体験ができる。また、地元の食を味わい、様々な文化にふれ、地元の行事に参加でき、受け入れ農家や地区との交流・ふれあいができる。

③農家ごとに特色があることを学習させる。

当たり前のことであるが、帰校してからの生徒同士の情報交換活動の中で、食事の違い・自由時間の違いが話題となる可能性もある。地域ごと、細かくは農家ごとに特色があり、均一的なものではなく、それぞれの地域にあった体験が実施されるものである。それぞれの特色について、事前に「感謝する」ということの指導が必要である。

おわりに

今回の修学旅行も、教員、生徒ともに手を取り合って「修学旅行を成功させる！」の意気込みで取り組んできた。修学旅行中を振り返ると、知覧特攻平和会館で展示に真剣に向き合う生徒の姿と、学校に帰り、バスから降りる時に「民泊最高！」と言い、両手に持ちきれないぐらいのジャガイモやタマネギなどの野菜を持った生徒の姿が印象的だった。また、修学旅行後、修学旅行を一緒につくりあげていただいた鹿児島の皆さんからの便りは、自然と生徒に感謝の言葉を出させた。その時、私たち教員は修学旅行の成功を実感した。